

「学校が蘇る」小中一貫施設一体型教育の実践

～大沼岳陽学校の挑戦～

七飯町立大沼岳陽学校 学級数 11 (校長 榎山 聰)

I 実践テーマの趣旨

七飯町では、社会に開かれた教育課程の実現に向け、中学校区単位でのコミュニティ・スクールの活性化と併せて、地域学校協働本部の設置を進め、地域とともにある学校づくりを推進するとともに、児童生徒の育ちと9年間の学びの連続性に重点を置き、家庭、地域、学校が一体となった教育を展開してきた。

本校は、令和2年4月1日の開校以来、「世界に輝け！」の校訓のもと、小中一貫における系統性・継続性のある教育活動を目指して、学年段階の区切りを「4-3-2」と設定し、それぞれのブロックに応じた取組を進めるとともに、9年間を通して郷土を学ぶ「大沼学」や、実生活で使える「英語学習」の実施などの特色ある教育活動を展開した。

II 実践の概要

1 9年間を貫く教育活動の展開

全教職員がよりよい学校づくりを目指し、学校教育目標「創る 煉える 思いやる」の共通理解を図るとともに、「まず始める、進みながら改善する」を合言葉に教育活動を展開している。

また、小・中学校など異なる勤務経験の教職員が一体となり、それぞれのよさを発揮できるよう、学年・学級や担当授業の配属を柔軟に考え、全教職員で全ての児童生徒を9年間かけて育てるため系統性・継続性を確保した。

2 「4-3-2」システムの構築

学年段階の区切りを子どもの発育発達を考え、「4-3-2」の3ブロックに設定し、それぞれのブロックのよさを発揮できるよう、徹底して「4-3-2」にこだわった。特に、第5・6学年では、すべての授業を教科担任制で行い、部活動にも参加できるようにした。今後は、定期テストや5段階評定を導入し、ブロック間の円滑な接続ができるよう努める。

3 特色ある教育活動の実施

(1) 郷土を愛する心を育む「大沼学」

第1・2学年は「大沼の四季」、第3学年は「大沼の生き物」、第4学年は「大沼の地理」、第5学年は「大沼の産業」、第6学年は「大沼の歴史」、第7学年は「大沼の観光」、第8学年は「世界の中の大沼」、第9学年は「大沼と自分の将来」と系統的な学習活動を設定し、9年間を通して郷土を愛する心を育むとともに、児童生徒が主体的、創造的、協働的に探究活動に取り組む態度や能力の育成を図った。

(2) 実生活で使える「英語学習」の実施

9年生卒業時に、日常生活で英語を話すことができる生徒の育成を目指し、児童生徒の実態に合わせたAll Englishによる授業で、英語のシャワーを浴びせている。また、楽しいアクティビティを連続させる授業方法と、英語科教員とALT、学級担任による複数指導体制の構築により、手厚い指導を展開している。

III 実践の成果(○)と課題(●)

- 9年間を見据えた系統的・継続的な教育課程を編成し、大沼岳陽学校の教育である「岳陽スタイル」の創造に向かって全教職員が一体となって主体的に取り組むことができた。
- 「4-3-2」の各ブロックが創意工夫ある教育活動を展開するとともに、学校全体で活動のねらいや内容を共有したことにより、9年間の円滑な接続を確保することができた。
- 計画的な縦割り班による活動の実施や、教職員の情報交流の活性化などにより、児童生徒の自尊感情の向上や、教職員の児童生徒理解、指導方法等の改善に向けた意欲の向上につながった。
- 学校や地域の特色を生かした小中一貫教育をより一層推進するために、旅行・集団宿泊的行事を中心とした行事の見直しや4-3-2システムを効果的に生かした活動の充実を図る必要がある。
- 児童生徒一人一人の多様性に応じた教育活動を推進する。そのために「4-3-2」の各ブロックのよさを生かし、地域はもちろん学校の外に向かってその活動のテリトリーを広く展開する。



【グランドデザイン】



【湖畔マラソン】



【駒ヶ岳登山】